Mr. Bassman（ベースマン列伝） Vol.2

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変･･･。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥ぐともの凄い名演･名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Sam Jones【サム・ジョーンズ】

Photo: © Nils Winther, SteepleChase Productions ApS

Profile

1924 年 12 月 11 日、フロリダ州ジャクソンビル生まれ。本名はサミュエル・ジョーンズ。父親はピアニスト。学生時代はブラス・バンドでドラムを担当。最初のアイドルはジャズ・ベーシストのレイ・ブラウンとオスカー・ペティフォード。マイアミに移住後は、ミルト・ヒントンにベースを教わるなど、ジャズに傾倒していく。50 年辺りにニューヨークに進出し、ティニー・ブラッドショウ、ケニー・ドーハム、イリノイ・ジャケー等と共演を重ねる。その後、スタン・ゲッツやディジー・ガレスピー、セロニアス･モンクのバンドに参加し、56 ～ 57 年には、キャノンボール・アダレイの初代クインテットのメンバーとして加入。59 年には、キャノンボール・アダレイ・クインテットに再加入し、66 年まで同グループで活動。その間、自己のソロ作品をリリースする傍ら、ビル・エバンス、デューク・エリントン、クラーク・テリー等と共演するなど、リバーサイドにおけるファースト・コール・ベースマンとしても活躍。キャノンボールのグループ脱退後は、66 ～ 69 年まで、レイ・ブラウンの後釜としてオスカー・ピーターソン・トリオに在籍。その後は、フリーランスとしてニューヨークを拠点に、シダー・ウォルトンとの共演や自己のバンド等で、亡くなる直前まで精力的な活動を続けた。また、ベーシスト以外にも、チェロ奏者、作曲家としても活躍し、「ユニット・セブン」や「デル・サッサー」「ピター・スイート」等の名曲も残した。1981 年 12 月 14 日肺がんのため死去。享年 57 歳。

玄人好みのいぶし銀のベースマン

≪ MR. HOME ≫

LA 在住、「INTERPLAY」レーベル・オーナー＆プロデューサーの妙中俊哉氏 (Toshiya Taenaka) からのコメント～

「サム･ジョーンズは､親しいミュージシャン仲間からは『ホーム（HOME）又はホームス（HOMES）』と呼ばれていた。『ホーム』とは家のことである。もっとも『ハウス』とは違う。この『ホーム』というは、家族がいる家庭、温かい家庭を意味しているのである。それだけミュージシャン仲間には慕われていた。筆者が最初に会ったのは、60 年代にジャズラインやジャズタイムのプロデューサーを務めた旧い友人のフレッド・ノースウォーシーから紹介されたのがきっかけであった。これが縁でクロード・ウィリアムソン・トリオのニューヨーク録音に来てもらったのが 1978 年であった。サムはすでに当時キャノンボール・アダレーやオスカー・ピーターソンのレギュラー・メンバーとして渡り歩き名を成していた。この背の高い実直そうなベースマンを『ホームス』と呼び捨てにはできなく､『ミスター･ホームス』と呼んでいたのは筆者だけであったろう。サムの堅実なベース･プレイは、レコーディング・セッションでもミステークすることはなかった。ミュージシャンが求めるベース・サウンドを確実に作り出していたベーシストであった。」　～身近で接した妙中氏ならではのサムの人柄を偲ばせる貴重なコメントに感謝したい。

≪サム・ジョーンズの映像≫

サム･ジョーンズの演奏シーンを映像で見たいなら、「JAZZ SCENE USA」シリーズのビデオ『Cannonball Adderley Sextet & Teddy Edwards Sextet』（Shanachie 6310）の映像がお薦め！ 1962 年のアメリカのジャズ・シーンを捉えたもので、Adderley Brothers、Yusef Lateef、Louis Hayes に、若かりし頃の Joe Zawinul の姿も拝める。チラリズム的に映るサムの姿が渋い。カップリングの Teddy Edwards Sextet の映像もカッコいい。（尚、このビデオは現在､国内リリースや DVD 化されているかは不明）

≪ベースマンとチェロ≫

サム・ジョーンズはチェロ奏者としても知られ、ナット・アダレイの『Work Song』でのプレイは有名だが、ロン・カーター曰く、サムやオスカー・ペティフォード、レイ・ブラウン、パーシー･ヒース等は皆、正式にはチェロではなく、チェロ･サイズのベースだったようで、チェロのチューニングに対し、彼等はベース・チューニングで弾いていたそうだ。因みに、鈴木勲は、リーダー作『ヒップ・ダンシン』でサム・ジョーンズにベースを任せ、自身はチェロを奏でている。また､チェロの名手でもあるロン・カーターのピッコロ・ベースも有名。

SJ's Leader Album

1960 年以降、晩年までリーダー作もコンスタントにリリースしたサム・ジョーンズ。ウッドベース、ジャズ・ベースの真髄を伝えながらチェロも披露するなど、数々の魅力的な作品を残してくれた。

サムのベースがブンブン唸り
チェロも披露した初リーダー作

The Soul Society
Sam Jones
(ビクターエンタテイメント：VICJ-23768)

Sam Jones (b, cello), Blue Mitchel (tp), Nat Adderley (cor), Jimmy Heath (ts), Charles Davis (bs), Keter Betts (b), Bobby Timmons (p), Louis Hayes (ds)

1. Some Kinda Mean 2. All Members 3. The Old Country 4. Just Friends 5. Home 6. Depp Blue Cello 7. There Is No Greater Love 8, So Tired

この 4 月に 58 歳の若さで突如この世を去った超絶技巧のベーシスト、ニールス・ヘニング・エルステッド・ペデルセンとのデュオをフューチャーした 1976 年録音の作品。サム 51 歳、ペデルセン 29 歳の時の録音。ベース以外はギターとドラム、数曲でパーカッションが加わる極めてシンプルな編成。技のペデルセン vs 貫禄のサムという新旧ベーシストのジャズ魂が力強く響く。珍しくソロイストとして自己主張するサムのベースが聴ける点でも必聴の価値あり！「イエスタデイズ」は、完全なるベース・デュオ。ペデルセンの技には驚愕させられるが、サムの深く重く味わいのあるベースを聴けば、ジャズ・ベースの真髄がわかるはず。2 人の巨匠の個性を思う存分楽しめる作品。

ニールス・ペデルセンとサムの
新旧ベース・デュオが実現！

Double Bass
N-H.O.Pedersen & Sam Jones
(SteepleChase: SCCD-31055)

Niels-Henning Orsted Pedersen, Sam Jones (b), Philip Catherine (g), Billy Higgins (ds), Albert "Tootie" Heath (per)

1. Falling In Love With Love 2. A Notion 3. Giant Steps 4. I Fall In Love Too Easily 5. Miss Morgan 6. An Privave 7. Yesterdays 8. Little Train 9. A Notion - take1 10. Miss Morgan - take2

ジャケットが最高！バラード「Lily」は真の名曲だ。この作品のプロデューサーこそが、左ページでもコメントを頂いた妙中俊哉氏。「このアルバムにはいろいろと裏話がある。アルバムのカバーはデビッド・ストーン・マーチンである。これはプロデュースのアシストをしてくれたフレッド・ノースウォーシーのアイデアであった。また本アルバム以外にもう 1 枚今度はシダー・ウォルトンのピアノとビリー・ヒギンスのドラムスのトリオ編成で録音して 2 枚組で出す予定であったが、結局後者のレコーディングは実現しなかった。ベーシストがリーダーなのにでしゃばらないところがサム・ジョーンズらしいといえる。」との妙中氏の秘話も興味深い。日本での再発、CD 化を切に願う！ 1979 年の作品。

妙中俊哉氏プロデュース
サム・ジョーンズ 70 年代の傑作

The Bassist!
Sam Jones Trio
(Interplay 7720)

Sam Jones (b), Kenny Barron (p), Keith Copeland (ds)

1. Rhythm-A-Ning 2. Lily 3. Seascape 4. Tragic Magic 5. The Hymn Of Scorpio 6. Bittersuite

SJ's Support Album

リーダー作とは別に、サイドマンに徹した時のサム・ジョーンズのベースがまた最高にいい味わいを出す。「ジャズの名盤の影に名ベーシストあり」とは、サムのベースが証明する。

Somethin' Else
Julian "Cannonball" Adderley
(東芝 EMI： TOCJ-6402)

キャノンボールとマイルスが共演した超名盤。「枯葉」「ラヴ･フォー･セール」等、シンプルながら渋い存在感をみせるサムのベース・ワークは見事。H・ジョーンズのピアノも哀愁バッチリ。1958 年録音。

The Texas Twister
Don Wilkerson
(ビクターエンタテイメント: VICJ-60500)

キャノンボール・アダレイのプロデュースで、テキサス・テナーのドン・ウィルカーソンがバリー・ハリス・トリオをバックに豪快にブローする快作。ベースはサムとレ・ヴィネガーが担当。1960 年録音。

Kenny Dorham And The Jazz Prophets Vol.1
(ユニバーサル： UCCU-5189)

ケニー・ドーハムが J・メッセンジャーズ独立後に結成した幻の名コンボ“ジャズの予言者達”唯一のスタジオ録音盤。バンドの疾走感、エナジーが凄い！ J・R・モンテローズ（ts）も好演。1956 年録音。

Blue's Moods
Blue Mitchell
(ビクターエンタテイメント: VICJ-61057)

ブルー・ミッチェルの最高傑作といわれる名作。サムのベースとウィントン・ケリーのピアノの共演は聴きもの。ベースが唸りをあげる冒頭の「アイル・クローズ・マイ・アイズ」は最高！ 1960 年録音。

Barry Harris At The The Jazz Workshop
Barry Harris
(ビクターエンタテイメント： VICJ-41181)

1960 年、サンフランシスコのワークショップでのバリー・ハリス・トリオのライヴ。若きバリーの躍動感溢れるピアノを好サポートするサム＆ロイ・ヘインズ。サムのベース音もデカく、臨場感抜群！

Sadao Watanabe At "PIT INN"
(ソニー･ミュージックジャパンインターナショナル: SRCS-9328)

1974 年のクリスマス・イヴに「新宿ピット・イン」で行われたナベサダのライヴ。シダー・ウォルトン (p)、ビリー・ヒギンズ (ds) と共にサムのベースが光る。サム作曲の「Blues For Amos」も収録。